

年間第15主日 マタイ13：1～9

2週間おきの山口日赤での献血の最中、『聖イグナチオ・デ・ロヨラの自叙伝』を読んでいます。ちょうど、昨年今頃、イエズス会の最終誓願を立てる準備をしていたので色々と振り返っています。イグナチオの同志と言えば、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルが有名です。その他にも、ペトロ・ファール、トリエント公会議でも活躍したライオスなど、イエズス会創設時の人たちが何人も聖人になっています。けれども、彼らが最初のイグナチオの同志だったわけではありません。途中で心変わりをしてしまった同志たちがいました。カリストは重病を押してイグナチオが異端の疑いをかけられた時には、一緒に監獄に入ることにしました。けれども、その後、何年かした時にはお金持ちになって周囲を驚かせました。イグナチオと苦楽を共にしましたが、後に別の道を歩んでいます。

ザビエルの場合、イグナチオから再三呼び掛けられた「たとえ人が全世界を手に入れても、自分の命を損なうなら、何の得があろうか。人はどんな代価を払って、その命を買い戻すことができようか。」（マタイ16：26）のみ言葉がずっと心の中にありました。遠く離れていても、1日たりとも忘れない固い友情がありました。

ザビエルとカリストの違いはなんだったのでしょうか？ きっと、み言葉への反応、出来事への反応が変わっていったんだと思います。ザビエルはイグナチオの思いを個人的に深めていきましたが、カリストは別のものに惹かれていき、二人には大きな違いが生まれました。

イグナチオの思いを個人的に深めるためにはどうしたらいいのでしょうか？ 出来事にしっかり反応することだと思います。今は「出向いていく宣教の時代」と言われます。職場や家庭などで、起きている出来事に反応して福音を伝える宣教の時代です。

昨日は、1つの幼稚園で夏祭りがありましたが、汗を流しながら着ぐるみを着てカマキリ先生に扮しました。記念撮影をしたり、盆の踊りでもカマキリ先生で太鼓をたたいて喜ばれました。また、今年で10回目ですが（東日本大震災が起きて2011年から始めました）、育てたカブトムシを5つの幼稚園で販売しました。親子で虫を育てたり観察する楽しさが広がっています。年少のおともだちが、カブトムシの様子を真剣に伝える表情が可愛くて嬉しくなります。売り上げは新型コロナウイルスで苦しんでいる難民の方に送ります。今一番、心を砕いているのは、発達に遅れや偏りがあるお子さんと家族をどのように支えるかです。あるお母さんが「発達障害と診断された後は地獄だった」と吐露されていました。不安を抱えて幼稚園に通わせている保護者をどのようにサポートするか？ 今、一番、心にかけていることです。自分なりに、起きている出来事に反応して「出かける宣教」をしているつもりです。

もう一方が、講演会や勉強会などの「出てきてもらう宣教」です。仕事や生活から離れて、時間を取ってもらって、出かけてきてもらう宣教です。以前は、生活にゆとりがあったので、このような方法が有効でしたが、今はそれだけの余裕がなくなっています。特に、現役世代はやるが多くなって出てくるのは大変です。「イエス様は、理想の上司だった」と私は思っています。職場の雰囲気や好転させる力があつたと思います。講演会や勉強会でそこまでもっていけるのか？ よく分かりません。

出向いていく宣教は、教会の外からの評価になります。ですので、努力がどのように実を結ぶのか分かりにくくなります。でも、そこに挑戦し続けないと「神様からいただいた種」は実を結びま

せん。

どうか、私たちの身の回りの出来事に反応できますように。外に出て、実を結ぶための挑戦をし続けられるように、主に助けを求めましょう。